

高島町和田の昔話

編 武 田 正

高島町和田の昔話

編 武 田 正

編・武田 正

高島町和田の昔話

目次

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
智恵くらべ	糠福米福	桃太郎	食わず女房	猿聲	蛇聲	化けものの話	内原の狐	細すね狐	猿と蛙	山鳩	吉次こいこい	狐とかわうそ
二九	二八	二三	二一	一七	一五	一四	一二	一一	七	六	六	五
26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
佐兵ばなし ― 酒の箆抜け ―	佐兵ばなし ― 酒の箆抜け ―	佐兵ばなし ― 酒の箆抜け ―	南の山の馬鹿聲 ― 馬の尻に札 ―	南の山の馬鹿聲 ― 蟹のふんどし ―	榎下の嘘の大先生	ほら吹き	無筆の立札	屁たれおひつ	せんだんの木	笠地藏	地藏浄土	正月の正夢
五五	五三	五一	四九	四八	四八	四七	四六	四四	四二	四〇	三五	三一

27	佐兵ばなし――田植――	五六
28	佐兵ばなし――田植――	五七
29	佐兵ばなし――田の草とり――	五八
30	佐兵ばなし――魚屋に仇――	六〇
31	佐兵ばなし――魚屋――	六二
32	佐兵ばなし――砂糖なめ――	六二
33	佐兵ばなし――豆腐のすだれ――	六四
34	佐兵ばなし――豆腐のすだれ――	六五
35	佐兵ばなし――死んだ馬が草食った――	六六
36	長手の伊佐	六七
37	船坂新兵衛	六八
38	馬場数衛の家	六九
39	大黒さまのおかた	七〇
40	海上の石芋	七一
41	長いむかし	七二
42	ノロノロ話	七二
43	果なし話	七三

伝説

(1)	遠藤初弥という人	七三
(2)	文殊尊	七四
(3)	鼠持の山の神	七五
(4)	山崎山・高内山・浅川山	七五
(5)	石伝・折石	七六
(6)	豊後屋敷	七七
(7)	海上	七七

和田の昔話調査ノート

七八

凡 例

昭和54年及び昭和53年度の置賜民俗学会による中和田、上和田の民俗調査時におけるものです。

1 狐とかわうそ

狐が、かわうそのとった魚を、だまして食ったど。そして、

「魚のとり方、教えつか」

て、かわうそに言^やつで、一晩げ、沼さ尻尾入っでだら、尻尾わがんねぐなつて、

一匹、二匹

小雑魚落ちてもええから

上がれ

ていうて、引張つたら、尻尾切つじやど。

(佐沢・山田喜一)

2 吉次こいこい

秋に鳴く鳥に、「吉次こいこい」て鳴く鳥いる。

海上（かいしょう）あたりに、親と子、二人暮しで、子どもは吉次と名付ったど。はいつ、何か流行病い^{はやり}で死んだために、毎日、そこらさ行つて、親が呼ばつていたのが、その親が鳥になつて、口から血、たらしたらし、鳴くんなど。

（佐沢・山田喜一）

3 山 鳩

鳩ぼつぽざあ、ソンピン（つむじまがり）な奴で、親が死んだ時あ、ソンピンだから、

「川端さ埋めてくろていうたらば、反対に、山さ埋めつか」

ど思つて、そう言つたそうだ。ソソピンだからな。

ところが子に言わせつど、

「今まで、親のいうこと、決して聞いたことないげんども、死んだ時ぐらひは、いっぺんは言うこと聞かんねべ」

と思つて、本当に川端に埋めだもんだも、山さ埋めないで。

そいつは、親が反対に言えば、川端さ埋めねで、山さ埋めつど思つたんだな。ほだもんだから、こんどは、雨降りさなつど、

かかあ流れる テデッポッポ

て泣くんだど。

(佐沢・山田喜一)

4 猿 と 蛙

むかしあつたどなあ。

猿ど蛙が、「なんだって、餅食べたくなつたなあ」て相談した。ほうすつど、「ここの家で、今晚、餅搗くそうだな」

搗けた頃合いを見て、猿さんが、

「おれが盗み出すから、お前、裏の川さ入って、赤ン坊の泣きまねしろ」
そういう約束でいたそうだ。

ほうすつど、家中で一生懸命、餅搗き始まつて、

「ああ、搗けた、搗けた」

なて言うてる時期に、こんどあ、裏の川で、オフギア、オフギア、オフギアで、赤ン坊の泣き声する。ほうすつじど、

「なんだ、赤ン坊、泣いてる」

て、餅搗きやめではあ、提灯つけて、裏の川さ探しに行つたてよ。家中で探しに行つて、誰もいねがら、まず、その間に盗んで行つたど。

「いっこう、何だて、居ねもんだな。騙されたみたいなんだ」

なて、家さ帰つてきてみたら、餅がない。そうして大騒ぎになつてゐるうちに、

お猿さんは、サエズリ山さ、かついで行つていつから、

「お前来い、そこさ」

て、蛙に言^ゆつてだ。

お猿さんが臼^{うす}かついで、蛙がこんど、ピタンピタン、ピタンと行くがら、時間かかるわけだ。

ほうすつど、やっと山さ辿りついたば、頂上にお猿さんがいだんだど。ほしてまず、

「分けて食うべ」

と、こうなつたわけよ。そうすつど、

「いや、分けて食べんのでなく、臼、こっから転ばして一番下さ、早くかけつけた方が食べるんだ」

ていうわけだど。

そうすつじど、蛙は遅いから、食べられる見込みないがら、

「そがなこと言わねで、分けて食べんべ」

「いや、ほでない」

て。そうしているうちに、臼、ゴロゴロと転がしてやったもんだがら、食べるも食べねもない。

ほして、追っかけて行ってみたら、お猿さんは臼より早いくらいなもんだから、臼あけて見たらば、いっこうに無がったんだ。ほして、上の方見っだれば、木さ、ちよこんと引っ掛っていだってよ。

ほして、蛙がそこまで来て、一生懸命食べつだつたてよ。したらお猿さんが、
「蛙どの、蛙どの、少し分けて食べさせてください」

「いや、そういう約束でない。早く着いた者が食べんのだから、おれ一人で食べんだ」

「いや、そう言わねで、分けて呉っじえおぐやい」

そういうもんだから、

「んじやら、赤目してみろ」

ほうすつど、千切って、餅、その目さぶつつけだど。

「あつい、あつい、あつい」

て食うど、食い終わったもんだから、

「いま少し、蛙どの、呉っじえおぐやい」

「んだら、お尻出せ」

ほして、お尻さ丸めでぶつつけたど。ほうすつど、

「あつい、あつい、あつい」

て、お尻から取りがただど。んだから、意地のわるいことはするもんでないど。
どーびん。

(佐沢・武田はる)

5 細すね狐

細すねの化けものていうのがいて、それが途中まで行った時に、狐がでで、
「途中、細すね狐の化けものが居っから、氣いつけで行げよ」

んだげんども、

「お前は、細すね狐であんめえな」
というから、

「こういうなだか」

て、脛細くして見せらつで、ぶっ魂消て、ひつくら返った時に、お包みなど取り上げられるというなだ。
(佐沢口・佐藤継雄)

6 内 原 の 狐

宮内（南陽市）の近くに内原というどこに、角力とり狐ざあいたど。

お角力さんが、御祝儀に苞持つて、原っぱまで来たとき、やつぱり、

「おれは、内原にいる狐なごんだ。お角力さん、狐の御祝儀さ行ってみねが」

コロコロっていうけあ、女になったもんだど。ほうしたら、あんまり器量ええ

もんだから、角力とりあ惚れたもんだずも。

「ほんじゃ行くべ。お前、ほんとに狐が」

て、だど。

「おれ、狐だごで。んだから狐の祝儀さ連て行くんだ」

ほして、その苞盗りじやくてよはあ、そうして角力が本性で言うには、なにころましいが（にぎやか）わかんねがったど。狐嫁入はやつぱり、角かくしかぶつて、そうして狐に騙さっじやんだから、原っぱで、朝草刈りに行ってもよ、一生懸命で踊りおどっていだっけど。まるで裸でな。たまげてしまつて、

「お角力さん、狐になったでねえか」

ていうど、

「いや、黙つてろ、いま、御祝儀さ招ばつできた」

ていう話だど。

（中沢・安部その）

7 化けものの話

ここの一番上かみに、鎮守さまあつこで。

そこはこんもりしたどこだったもねえ。木ああつてよ。そこさ化けものが巢食つて、まず人が通つて食れで、仕様がながつたてよ。

そうすつど、ある日、村中の相談になつたど。

「どうしたら、その化けものを退治でぎつか」て。

そうしたら、一番と智恵者が、

「ほんじゃ、おれにまかせろ。酒何升と餅と買つてこい」

そういうわけで、酒と餅買つてもらつて、自分が一人で出かけたんだど。ほうすつど、その鎮守さまの門前に立つて、大声で、

「今日はお化けども出て来い。うんと酒を御馳走すつから出て来い」

そうしたら、全部出てきたんだつて。そして、

「その酒、全部御馳走すつから、お前がおれの言うとおりに化けられつか」

「造作もねえごんだ。化けてみせる」

ほうしたら、さんざん酒飲んでがら、こんどあ、

「この掌に、納豆に化けてみる」

ていうたら、掌に納豆に化けだんだど。ほうして、持てつた餅を出して、その化けものの納豆を餅につけて、みな食べできたど。んだから、智恵のある人にはかなわない。どーびん。

(佐沢・武田はる)

8 蛇 蟬

娘さんいるどこさ、毎晩、どっからともなく、分らない人が、ええ男になって、化けて来たんだど。

そして、娘さんが妊娠したんだど。そうすつど、どこの人だが、わけわかんねし、すつから、

「まず、着物の裾に針をつけてやってみなさい」

て、糸を長くして、こんど糸つけてやったど。そうすつど、糸跡絶えたところで、その娘さんが追いかけて立っていたど。そうすつど、親子ばなし始まったど、中
でよ。

「まず、妊娠もしたし、ええあんばいだ」

ていう話語って、息子がいやったどこだ。そうすつど、お母さんが、

「人間ていうもの、賢いもんで、五月のお節句に、菖蒲湯に入れば、全部
それは流れるもんだ」

そういう話を、親子して語っていたのを聞いたわけだ、自分が。そうすつど、
「やっぱ人間でながった。相手は蛇だったなあ」

ていうわけで、五月節句に、その話聞いてきたとおり、菖蒲湯に入ったら、やつ
ぱり蛇子でたど。

んだから、女ていうのは、菖蒲湯に必ず入るもんだと教えられていたな。どー
びん。

(佐沢・武田はる)

9 猿 聲

むかしあつたけど。

むかし、山の中の百姓で、三人娘もったじいさんがいだったど。

その年は旱魃で、田さ水かかんねくて困っていだどこさ、じいさんが行つて、
「誰でもええから、田んぼさ水かけて呉っじや人に、娘くれる」

て語つたところが、猿あ聞いて、その晩のうちにはあ、ひつとつ掛けで呉っじや
ど。

そして次の日行つてみたら、満々と水掛つていたもんだから、猿あ来て、

「じいさん、娘呉ろ」

ていうわけだげんど、じいさん、ほとほと困つたんだごではあ。まさか、ほだ
なこと、人間、猿の嫁にするわけに行くまいし、仕方なくて、家さ来て、何たて
猿に約束したもんだから、守らねくてなんねえし、一番大きい娘に、そいつ言う
たところが、

「なに、まず語っているなだ。親父あ、まず、おれあ猿の嫁なて、たわえないこと語っている」

なて、親父言わっじやど。

こんどは二番目のあいっさ言うたらば、

「なに、おどつつあん。嫌んだやんだ。おれあ猿の嫁にならね」

まず困ってはあ、じさま寝てしまったど。そうすつど、末の娘がでてきて、

「なじよだ」

ていうたら、

「こういうこと約束してしまつたがら、ほとほと困つた。ほんで何としたらええがどて、猿に約束守らねでは、仇討ちされんべし…」

「んじや、おどつつあ、おどつつあ、おれ、嫁になつから」

「ほんじや、なつてくれつか」

て、なつて行つたど。して、猿も喜んで、自分の住家すみかさ行つたわけだべちや。

ほして、こんど、食うものあさつて、いよいよ春の花の咲く頃になつたば、こん

どは、

「餅搗いで、親父んどこさ持つて行くべ。餅、うんと大好きだから」

「ほんじゃ、そうして呉^けつか」

というわけで、こんどあ、猿が一生懸命で餅搗きして、いよいよ搗いて、

「ほんじゃ、何さ持つて行ったらええべ」

「んだなあ、余^よのものさつめつど、鍋さつめつど鍋くさいというし、何さもつて行ったらええべ、困ったもんだ。ほんじゃ臼がらみして持つて行ったらええが」

「その方だら、一番よろこぶべ」

臼背負つて、二人は、おかた先になつて実家さ來たど。

途中に來たら、川ぶちの崖んどこに、いや、美しい山桜咲いっただけど、んで、

「あの花なあ、一枝とつて行ったらば、おどつつあま、なんぼ喜ぶんだか」

「んだか、よしよし、ほんじゃ、ほだなもの、造作ない」

て、こんど、臼置いて登る氣になつたら、

「臼置くじど、土くさくなるてはあ、じじ、食^かねごんだ」

「ほうか、ほんじゃ」

て、お得意なもんだから、臼背負って登って行っただ。

そして、だんだんに行って、

「この辺か」ていうど、

「そいつもええげんども、いまちいと上んなだど、なおええようだ」

だんだんに登って行って、まだまだ行って、「ここらか」ていうど、

「いま、ちいと上んな美しい」

て、よくよく細いところまで登らせて、そのうち、枝折おだつてしまったんだごではあ。臼背負ってんべし、下、水なもんだから、すぼげで死んでしまったんだ。

死んでしまったし、家さ行ったら、親父、たまげて、「何だった、猿は」て言ゆつたれば、

「こういうわけで、途中で死んだ」

「ほうか」

て、なるほど賢い娘にかなわなくて、感心して、その娘がとんな仕合せに暮したということあんだから、親孝行はするもんだ。どーびん。

(佐沢・山田喜一)

10 食わず女房

むかし、欲のふかい百姓あいて、まだおかた貰わねげんども、

「御飯食^かね、稼^かぐおかた欲しい」

ていたどこさ、ある日、来たていうわけだ。嫁がな。そして御飯も食ね。稼^かぐことは稼^かぐ、何言うたて御飯食ねもんだ。

そうすつど、その聲もふしぎに思つて、ある日、梁の二階さ隠つて見つたというもんだ。そうすつど、御飯三升飯炊^{めし}いだもんだ。

それからこんど、鯖三連も焼いで、何すつかと思つて、どき持つて行くもんだ

と思つて見つだところあ、他所に持つて行かないで、こんどは自分の髪結つたな、ほどこいたところあ、スリバチみたいな口開いだずう訳だごではあ。その頭さな。

そしたば、よつく見たば、鬼なもんだど。ほして、三升飯と鯖、みなつめではあ、知しやねふりしつたのを、見つけらつたど分つて、ほうして、追つかけらつじやわけだ。聳が。

ほして、何とも仕様なくて、こんど逃げて行つた途中に、ヨモギとシヨーブのある田んぼあつたもんだから、そき隠つていたところが、鬼がそれきりで、来ねでしまつたど。んだから、五月節句には軒さ、ヨモギとシヨーブさすのは、鬼よけだど。どーびん。んだから欲のふかいことはするもんでねえ。

(佐沢・山田喜一)

11 桃 太 郎

むかしむかし、あるところになあ、じじとばばがいだったど。

じじは山さ柴伐りに行つて、トカントカンで柴伐りしたけど。ばっちは川原さ洗濯に行つて、コチャコチャ、コチャコチャて、一生けんめいでしたら、山の方から大きい桃、赤いなど白いなど流つてきたけど。

ほしたら、ばっちやが見て、ほして、

赤い桃あ こっちやこい

白い桃あ そっちや行げ

て、赤い桃来たら、おばあちゃんの方さ、赤い桃あズンボコ、ズンボコで流つて来たもんだから、そいつをこんどは、ばっちや手伸べで拾った。

「ああ、こだな大きな桃、まず、どっから流つて来たんだが。早くじっちやどさ行つて、分けて食うべ」

て、持ってきたど。ほしてこんど、家さ来て、俎板の上さあげて、包丁で割ん

べど思つたば、一人こで、パカエンと割つじえ、それから、オギヤエ、オギヤエというもの、赤ン坊が出てきたど。

じつちやとばつちや、子ども居ねんだから、

「桃から生まつじやがら、ほんじゃ桃太郎と名付けんべな、じじちや」

て、そして桃太郎と名付けて、乳もないし、何もないもんだから、甘酒を作つたり、おかゆを煮たり、食べさせて、

「大きくなれ、大きくなれ」

て、毎日食べさせつだど。ほしたら、だんだえに大きくなって、こんど兄んちやぐらいになつて、大きく育つたど。

あるとき、

「じつちや、ばつちや、大きくなって、今までの恩返しに、鬼が島さ鬼退治に行つて、悪^われべがあ」

て、じつちや、ばつちやどさ言うたど。

「鬼退治などはあ、ええどこでないから、ほんじゃ、悪い者征伐してこいよ」

て、やったていうわけだ。ほして、その途中、腹減つど悪^われがら、

「んじゃ、キミ団子、拵^{こしら}って食せっから」

て、キミ団子拵^{こしら}って、じつちやとばちや、パカンパカンと叩^{たた}いて、そして粉にして、丸めて、キミ団子いっぱい拵^{こしら}えで、袋さ入^いつで腰さ下げで、桃太郎あ行^いつたど。

そしたら、途中まで行^いつたら、ワンワンて、犬に会^あつたど。そして犬は、

「桃太郎さん、桃太郎さん、どこさござる」

「これがら、おれは鬼が島さ鬼退治に行くどこだ」

「その腰に下げつだな、何ですか」

て聞^きいだば、

「これは日本一のキミ団子どて、一つ食えばうまいもの、二つ食えば辛いもの、三つ食えば苦いものだ」

「ほんじゃ、おれちや一つください。お伴すっから」

犬が一緒になつて、犬連れて行^いつたど。

そして少しおもって、山ささしかがったらば、山の中から、ブーンと飛んできたものいたがら、何だと思つたれば、キジがちよこんと前さ出て、そして、

「桃太郎さん、桃太郎さん。どこさござつどこだ」て。

「犬ば連れて、鬼が島さ鬼退治に行くどこだ」

「そのお腰につけたもの、何だ^{なえ}」

そしたら、

「これは日本一のキミ団子どて、一つ食べばうまいもの、二つ食べば辛いもの、三つ食べば苦いもんだ」

「一つください、お伴して行んから」

て、行つたど。また少し行つたら、猿がキヤキヤ、キヤキヤていたど。そして猿にもそのとおり、

「桃太郎さん、桃太郎さん、どこさ行く」

て、「おれもお伴して行かせてください」て、三人連れて行つたていうわけだ。ほして、鬼が島さ行つたところが、青鬼なの赤鬼なのいっぱい居で、ほして、

「何しに來た」

つうもんで、掛かったげんども、桃太郎さんと三人、かぶつくやら、みな鬼退治してきて、鬼降参して、

「これから、桃太郎さんの言うこと何でも聞くし、宝物は全部お上げしつから、どうか勘弁しておくやい」

て、青鬼から赤鬼から、全部膝まづいていうたもんだから、桃太郎さんが、「んだらば、勘弁してやつから、これから決して悪いことするでないぞ」

て教えて、宝物全部、車さつけて、そして、エンヤラヤ、エンヤラヤて、犬が引き出すエンヤラヤ、キジが綱引くエンヤラヤ、猿が後押すエンヤラヤて来て、じっちやとばっちやを安態に、恩返しして暮したけど。

どーびんさんすけ、さるまなぐ、さるのまなぐさ火あ入って、けんけん毛抜きで抜いだれば、まんまんまっかな血ができた。

(川原子・鏡みやる)

12 糠 福 米 福

栗拾いに行ったごんだど、糠福と米福は。自分の本当の娘の米福には、尻縫った袋あずけた。それから、先妻の子、継子の糠福には尻抜けた袋あずけたど。

ほして二人で、奥山さ行つて、一生けんめい採っていただけんど、姉の糠福の袋さ溜んねんだごてはあ、尻抜けていつから。

そして妹の米福の方さばり、いっぱい溜ったど。

して、晩方暗くなつたから、米福は、

「歩^あえべはあ」

ていうたげんども、姉は拾わねもんだから、来らんねわけだ。ごしやがれつからな。んで、妹の方ばり来て、姉の方が来ないで、泣いっだところさ、神さまが来て、

「なして泣いっだ」て、聞いたところが、「こういうことだ」

「んじや、こういう風にして、こうしろ」

て、栗をでっしら、こっちの家さ来て出るように教えらっじえ、継母の前さ出たところあ、継母は、

「ほだなはずはないげんども」

て、たまげて、それから、継子いびりさんねていうたど。

(佐沢・山田喜一)

13 智恵くらべ

大金持がいて、そこで何十人も人使ってあつたそうだ。

ある日、旦那さんが使っている若い衆を全部、呼んでよ、そして、

「お前だが希望してるものは、何でもやるから、のぞみのものを話してみろ」

そうすつど、みんなてんでに、

「ここの家の一番とええ膳碗で食事してみたい」

そういうことを言うてみたり、

「箕さいっぱいのお金欲しい」

いろいろな注文が出たど。

その一番下働きの若者が、

「この家のむこさんになりたい」

そうすつど、旦那さんが、一旦口出したんだから、何ていうたて、望みなええてやんなねから、一人一人に、みなかなえだげんど、その聳さんになりたいというのだけは、困ったもんだ。娘さんが承知しなくては。

んだげんども、一旦、するといった以上は、昔のことだから、させなくてなんねえし、そしていよいよ結婚式という場面になったら、三々九度の盃に始まろうとしたら、お嫁さんが白装束になって、

へ天より上に咲く花に

よくも思いかけたぞ杣蔵野郎

ていうたそうだな。

ほうすつど、簪さんはさすがに、すぐに、返り歌詠んだつて。

へ天より上に咲く花も

落ちれば下の奎^{もぐ}となる

そうすつど、その嫁さんはびっくりして、

「人は見かけに寄んねもんだ。やっぱりここの簪になるていうぐらいの人は、それだけの力があるんだ」

と思ひ返して、めでたく一緒になったど。どーびん。んだがら、人間て見かけによんない。なんぼ下に働いていてもなあ。

(佐沢・武田はる)

14 正月の正夢

一人息子の家があつたんだど。

そして、正月元日の夜に、

「今晚夢見たことは、必ず明日の朝は、お互いにお話し合うごと」

こういう約束で寝たそうだ。ほうすつど、親たち二人が宝ものの夢見た。悪い夢はまず語つて消してもらうどええ。そうすつど、息子はと言わねがつたずも。ほうすつど、

「やつぱり、最後の約束だから」

て、勘当さつだていうわけよ。

ほうすつど、ずつと山道の方行つたわけだ。まず自分が夢見たとおりの道を行つたわけだ。しばらくしたら、すばらしい、昔の旧家だごでなあ。あつたど。(昔、かくれみのとかくれ笠ざああつたから、それ着てな)

「竈焚きでも、何でもええから、使つてください」

て、おねがいしたら、そこで使つて呉つたど。

ほうすつど、こんど、夜になるじど、つまない部屋もらつて、ローソク点けで勉強だど。かくれみのとかくれ笠取つど、すばらしいええ男だったども。

ほして、一人娘いでよ、

「何だて、あの部屋にいつまでもローソクがついでる。何かふしぎなことあんでないか」

ていうわけで、覗きみしたわけだ。ほうして覗きみしたら、すばらしい男だもの。すっかりその人さ惚れてしまったぞ。

ほうすつどこんど、恋の病いになって、寝付いたわけよはあ。あつつの医者、こつつの医者で、名医にずいぶんかがつたげんど、どんなことしても治んねど。んで、ある占いに行つたれば、

「ここの家族で、一人、誰でもええから、お薬を持って行って、それ持つて行つた薬をのめば、必ず、この病気はええくなる」

こういうわけで、こんどはあ、いっぱい使つていっから、その使つてだ人、ほら上の者から下の者まで、全部、一人一人、薬を持つて行つたげんど、誰一人のもの、飲まねがつたてよ。

ほして、こんど、

「ああ、一人、竈の火焚きじいさんいた。その人に、持つて行つたてわかんねべ

げんども、とにかく一人しか残っていねがら、その人に持つて行つてもらう他ない」

そういうわけで、もつて行くとなつたら、かくれみの、かくれ笠脱いだら、すばらしい人だもの。

そして持つて行つて、お薬出したら、その娘、起きて飲む。それでその娘、治つたわけだ。

「治れば、ここの家の聲にする」

という約束だったがら、その息子がその家の聲さんになつたど。

実は、息子はその夢見たから、誰にも言わんねがつたてよ。

(佐沢・武田はる)

15 地蔵浄土

むかしあつたけど。

あるところに、おじいさんとおばあさんがあつたど。

おじいさんが庭にお掃除に行ったときに、どこからともなく団子ころんできたど。そうすつど、

団子どの 団子どの

どこまでござる

て、おじいさん、追いかけて行つたわけよ。ほうすつど、

御山の堂まで 御山の堂まで

て行くわけだ。ほして、しばらく行つて、また、

団子どの 団子どの

どこまでござる

ていうど、やっぱり、

御山の堂まで 御山の堂まで

ていうのだど。ほしてしばらく行くど、今度、小さな穴があつて、その孔から団子が転がって行つた。そうすつど、おじいさんもそいつき従いて行つたど。行つてみたば、お地藏さんがあつた。ほしてお地藏さんの前に行つたれば、団子なくなつてだもんだから、お地藏さんに、

「団子が転がって来ながつたが」

てお聞きしたら、

「いや、転がって来たげんども、ごちそうになつたがら、そのお礼として、今晚ええことあつから、まず、手に上がれ」

「もつたいないから、上がられない」

「ええから、ええがら」

ていうわけで、手に上がった。次に、

「肩さ上がれ」

そうすつど、肩も上げていただいて、今度、頭さ上がれていうわけ。

「もったいない、とにかく頭さなの、どんなことあっても、上がられない」
ていうたげんど、とうとう頭さ上がって、そうして、

「二階の上に、上がって待つてなさい」

と言わつて、

「そうすつど、今晚、鬼どもが集^{あつ}ばつて、博^{ばく}打^{うち}すつから、見てろ」

ていう。そうすつど、こんど、

「ええ加減したらば鶏の鳴き真似しろ、コケコッコーといいなさい」

そうすつど、鬼共は、

「一番鶏鳴いた」

少し経ったら、また「鶏の真似しなさい」というもんで、それでまた鶏の真似して、そして三回目やったれば、今度は鬼共は、

「夜明けつから大変だ。んだから、また明日にすんべ」

というわけで、散らばったお金、そのまま帰って行つた。そうすつどお地藏さまが、

「そのお金を全部持つて行きなさい」

そんで頂いてきたわけ。ほうして今度あ、家さ帰ってきてお金ひろげていると、お隣のおじいさん、おばあさんが来て、そこを見て、

「どうしてこんなにお金もうがった」

そうすつど、そのことをみな聞かせたわけだ。と、

「ほんじゃ、家でもそういう風に、じさまをやらんなねえ」

ほして、団子拵つて、ほして、その団子を押しつけ行ったら、やっぱり穴があつたつて。ほして、それから団子を転ばしてやつて、お地藏さん立つてやったもんだから、

「食べろ」でも、

「食べたくない」

ていうな、無理無理口さ突つ込んで、手にのり、肩に上がり、頭に上がつて、ほしてやっぱり待つてだつて。ほうすつど、こんど、やっぱり言われた通りに、鶏の真似三回やつて、そのうちに、鬼の方で、

「人くさい、人くさい」

て、始まったてよ。そしてとうとう人くさい、人くさいではあ、そのおじいさんが見つけられたわけよ。そうすつじど、

「ゆうべのお金も、このおじいさんが持つて行つたんだから」

て、さんざんにいじめられて、泣き泣き帰ってきたど。

ほうすつど、おばあさんが、血だら真赤になつて、おじいさんが帰つて来たもんだから、

「ずいぶん、ええ着物もらつて、ほして喜んで歌うたつて来た」

というて、おばあさん眺めて待つていたら、家に帰つてきたら、そうでながつたど。

んだから、人の真似ざあするもんでないど。どーびん。

(佐沢・武田はる)

16 笠 地 蔵

むかしあつたけど。

むかしむかし、在郷に、あんまり楽でない、難儀しているじさまとばさま、あつた。で、

「今日もはあ、雪あ降ってきて、すでに年取りも来るし、ばさま、まず、笠売ってきて、年取りでもすんべ」

て、じさま出かけた。それで、出かけて行つたげんども、こんど、途中に行つたば、地藏さまが雪の中さ立っていた。

ほんで、笠売んねえで、その地藏さまさ、七つだか持つて行つた笠かぶせてはあ、手ぶらで帰ってきた。ばさま、

「じさま、年取りだから笠売つて、銭もつて来んべ」

と思つて、篋へらで尻叩けついて待つてだところあ、いっこうにそだなことしないではあ、ほだたて、萎しおつじゃ顔もしてこない。そしてわけ聞いだれば、

「ばさま、ばさま、こういうわけだったんで、途中で雪あ降って、地藏さま、何もかぶっていねがら、みな売んねではあ、地藏さまさかぶせて呉^けだ。ほんで、仕方ないがら、ばさま、大した年取りさんねったてはあ、仕方ないごではあ」
ていうたば、ばさま、

「ええがった、ええがった。じつちや、そんでええがったなだ」
て。そんじえ、二人ではあ、食うものもないから、寝たてだ。

ところが夜中に、何かやんやんて音すつど思っていたところあ、夢でないしと思つて聞いてつど、

笠の代をもつてきた

笠の代をもつてきた

て、何か遠^とがくで音あする。だんだんに、

「まさか、おら家^えきたのでないがんべ」

と思つていだげんど、だんだんに近聞さ来て、ほしていだば、こんど神さまが
いっばい来て、米だ、魚だ、いや着物だつて、家の前さつんで、そして、

「笠の代、もってきた」

て行つたど。

そして行つたところが、昼間売んど思つた笠のかぶせた地藏さまだつたがら、ばさまも、「ええごどした」て、喜んだど。どーびん。

(佐沢・山田喜一)

17 せんだんの木

すばらしい長者の家だつたど。

その一人娘いだつたそうだ。その旦那さまが、タバコ一服喫むうちに、千まで数えられる人いたら、髯にする。そういう立札を立てだど。

ほうすつど、みんな、そういう家だから、髯さんなりだくて、「一、二、三、四……」と数えつけんどもよ、なんぼ数えても数えても、千数える人、いながつたそうだ。

そうすつど、ある日。

やっぱり若い者が来て、

「んじや、わたしが数える」

ていうたど。

「^{いっ}くは^に二くは、^{さん}三くでないが、^{じゅう}三くは七くは^{じゅう}十でないか。十・十、^{とお}十は百ではないか。百ずつ^{とお}十は千ではないか」

ほんで、たちまち千数えたど。そういうわけで、

「いや、仕方ない。それでは^{さん}賀さまにしねえ」

て、^{さん}賀さまにした。

ほうして、しばらく経ったところが、むし暑い日だか何だか知しやねげんど、^{さん}賀さんがすばらしい大蛇になってよ、裏のせんだんの木さからまっていたつけど。やっぱり、人間わざで出来ないことだど。んだから、あんまり高望みはしては駄目だという話。

(佐沢・武田はる)

18 屁たれおひつ

おひつあ、嫁に行つてよ、青い、赤味のない顔してんなだど。

「おひつ、どこか悪くないが」

「おなら出たくてよ」

というんだど。

「そげな、おなら、堪^{こた}えていつことない。自分が出るだけ、したらええがんべ」

「おれは、ちよつこら、軽くないおならだから、炉櫓おさえで」

て、やった。

そうすつど、親たちも魂消たごんだど。そうして、やつぱりおならしたもんだずも。そうしたら、そこのお姑さま、火棚さとんでしまったごんだど。そうすつど、

「こんな嫁、一日も置かんね」

そしてはあ、追^おい出さつたじゆうもんだ。そうすつどこんど、

「仕方ない。自分がおならして、^{よこ}寄越さっじやんだから」

て、とぼとぼ帰ったんだど。

そしたら、子どもら三人ばり、梨のもぎ方しったんだどな。ほうして、小さい竿で、もがなくてよ、いだ時、

「おれ、屁でもいで呉^けつかな」

どかて言うたそうだ。

「嘘^{うそ}ばり語って、屁でなのもがんねごで」

そうすつど、やつぱり、おひつ、屁でもいで呉^けつじやそうだ。そうして今度、そいつ有りだけ持って行げなんて言^やつじえ、持って行ったら、また途中で、船が動かんねでいたな、そいつば、また屁で動かして呉^けつじやんだど。そうしてすばらしくいろいろなもの、もらったど。

どーびんさんすけ、さるまなぐ、さるのまなぐさ毛が入った。けんけん毛ぬきで抜いだれば、まんまん真赤な血ができた。どーびん。

(前田・安部その)

19 無筆の立札

屋根葺きしてよ、みなカヤ屋根だべ。

そうすつど、お金続かねぐなつたんだごではあ。そうすつど、半分して止めだつてよ。

そしたらそこさ、ちゃんと立札かけつただんだけど。島津の御門描いでよ、ほして、その御門のどこさ鹿が寝つだんだつてよ。そこさ、五つのフクベン描いだんだけど。

何を書いっだと思つたれば、

へしまつしかねて、いつ、ふくべん（仕末しかねて、何時葺くべ）
というのだつたど。

（佐沢・武田はる）

20 ほ ら 吹 き

秋に茸とりに行つたど。

ほうしたれば、大きい茸ばり出つだもんだから、

「これは大したもんだ」

て思つて、手掛けんべと思つたば、大きな蛇あ、うさきくわえて、鎌首上げつ
だんだんだけど。

ほれからこんどあ、逃げた逃げた、小一里もきて、こんど大丈夫だと思つて、
後ふり返つて見たば、まだ尻尾。パタパタで、あつたてよ。

(佐沢・山田喜一)

21 栖下の嘘の大先生

上山の栖下に、嘘の大先生さあ、いだ。その嘘の大先生さ行つて、

「嘘、教えろ」

て行つたらば、

「待つてろ。んじや、家さ行つて本持つてくつから…」

て行つたところが、本などがつたど。それは嘘のはじまりだていつたど。

(佐沢・山田喜一)

22 南の山の馬鹿聾 — 蟹のふんどし —

馬鹿聾は嫁もらつて、嫁の家さはじめて行つた、三ツ目だかの日に、

「にさ、海岸ばたの嫁の家さ行ぐとき、何て彼^{なえ}えて、蟹^かあ出つから、蟹さあな、

ふんどし取ってから食^かなねえぞ」

て教えらった。

「ふんどし取るくらい知ってる、やい」

て、行っただけだ。

案の定、行くと、蟹出て、仲人も行っただけで、モソモソ、モソモソで、馬鹿聲あ腹のどこさ手やってっから、何しったと思っただら、真黒いふんどし、ずるずる引張って、傍き置いて、蟹、ガモガモと噛^かんでいた。

蟹のふんどし取って食うな、自分のふんどし取って、蟹食ったてよ。

(佐沢・山田喜一)

23 南の山の馬鹿聲 — 馬の尻に札 —

南の山の馬鹿聲あ、おじのどき、

「用足しに行つてこい」

て言^やつで、そして、

「新築したばかりだから、行つたら賞めてこい」

「何て、賞めだらええなだ」

ほして、

「たしか、家建てたぐらいだから、新しいお仏さま買ったべがら、新しいお仏さま買ったらば、見て、どこかに穴ぽこあつどきにや、へええ仏さまだげども、この穴さえもないどゝていうたら、へおんつあん、おんつあん、ここさ掛図でも掛けつどええゝて、賞めろ」

そのとおりに行つたど。したら、なるほどあつたけどら、穴がよ。

「おんつあん、おんつあん、もつたいないどこに孔あつから、掛図、ここさ掛けたら……」

「なるほど、にさ、馬鹿だと思つてだら、馬鹿でない」

て、おんつあんに賞めらつじやど。ほしたら、ずうつと厩の方さ廻つたれば、

一生けんめい見っだつけどら、どこかに穴あつかと思つて見ったら、どこにも穴ないがっただ。ほして馬の尻見だらば、そこに穴あつたて。

「おんつあん、ここの馬の尻さも掛図かけっどええ」
ていうたど。

（佐沢・山田喜一）

24 佐 兵 ば な し ― 酒の籠抜け ―

佐兵が馬鹿なふりしているが、賢こい者。ほれがら、久ていうのは、賢こいふりしている馬鹿な者。そいつあ友だちだったど。

ほして、その頃は、隣村さ酒など持つて行がんね。んだから、持つて行つて向うさ売れば、大した金もうけされつかったから、何じよがして、持つて行きたいというわけで、酒樽の新しいのさ、小便つめて持つて行つた。そして、関所さ行つた時、

「どこさ行く」

ていうたらば、

「肥料^{だら}呉れに行くのだ」

「どこさ行く」

「畑さ持って行って呉れんのだ」

「何だ、酒でないか」

ていうたところが、

「酒でない。こいつあ小便だ」

ほしたば、匂いかいでみっど、酒の匂いぶんぶんするわけだ。酒樽だから、

「そいつ、酒でないか、持ってこい」

て、開けて、かぼつと飲んだれば、小便だった。

「これ、駄目だ」

ていうわけで、

「ああ、持って行げ、持って行げ」

次の日から、新しい樽に酒つめて、

「小便だ」ていうど、

「通れ！」て、隣村さ持つて行つて売つて、そして、もうけたど。

（佐沢口・佐藤継雄）

25 佐 兵 ば な し ― 酒の箆抜け ―

むかしは、ここは御領と私領で、ここの和田は幕府の御領地だった。そして米沢は羽黒川から向うは上杉家の私領だった。

そうすつど、御領地というものは、年貢が安がったがら、物が豊富だった。そのために、私領さ持つて行ぐど、もうがかった。

そんな時、佐兵ていうのが、酒運びしつた。一番先に、番人が関所に立つていつから、そこに新しいダンボ（酒樽）さ小便つめて、背負つて行つたわけだごで。

して、役人にとがめらっじや時、

「小便だ、小便だ」

ていうげんども、役人が、なえでかえで、見せろて聞かないわけで、降ろさせ
て、飲んだら、やっぱり小便だったど。

それから、次の日から毎日、酒をつめて背負って歩いだど。そして、なるだけ
役人の傍通つど、

「くさいがら、そっちや行げ」

つうもんで、関所を通したど。そうして金もうけしたつていうから、佐兵てい
うな、賢こがったんだべ。

(佐沢・山田喜一)

26 佐兵 ばなし ― 酒の箆抜け ―

米沢さ行ぐのに、新しい桶さ、小便つめて行つたど。そうして途中の関所とめらつじや。ほして、

「その桶、何だ」

「小便だ」

「ほだな新しい桶さ、小便つめるざあない」

「ほんとに小便だ」

ていだげんど、「どれ」というわけで、お役人がのんだ。やっばり小便だ。

次の日、きたない桶さ、酒もつて行つて、

「何だ」

「酒だ」というたげんども、

「佐兵小便だべ、早くもつて行げ」

て、金もうけしたど。

(中和田・我妻栄一)

27 佐 兵 ば な し ― 田 植 ―

藁仕事や草刈りなどの作業のときとか、木小屋での若衆の集まりのときに、中年の人から聞いたものが多い。

佐兵ぎあ、田植して、人より早く上がって泣いているもんだつけ。

「なして、佐兵、泣いっだ」

ていうたば、

「みな、右の手で植えて、（ウネが）曲っけんど、おれ、左手なもんだから、曲らねくて、くやしくて泣いっだ」

て、泣いっだていうたど。

（佐沢・山田喜一）

28 佐兵 ばなし — 田植 —

みんなが田植すつどき、植えるに曲るていうんだな。佐兵がわんわんて泣いでる。

「なにだ」ていうど、

「なに、みんな綱張つてまで、曲るもんだ」

て泣いでる。みんな馬鹿にさつた氣して、

「ほんじゃ、佐兵、植えてみろ」

「おらだ植えつど、こうしか植えらんね」

て、植えだていうんだな。そいつあ、タテ、ヨコ、きちんと植えだていうんだな。

(中和田・我妻栄一)

29 佐兵 ばなし — 田の草とり —

田植のときもその通り、田植してで、久さんという人と田植すつど、自分の方
ばりヨコ・タテ十文字で、田植上手で、縄などいっこう張んねで、ずうつと植え
られなかった。そして、二人で田植して、

「久さん、久さん、おら家さ来て、田の草とり、助け^すで呉ねが」
て、行ったらば、

「田の草など、おれ下手だから、しね」
て、久さんがいたらば、

「下手だて、かまねがら、来て、助け^すろ」
ていうたら、

「ほんじゃ、お前先に来て助けろ」

ていうたもんだから、こんど、佐兵が先に久さんどさ行つてよ、
「久兄^{あん}にや、ほんじゃ、田の草とりすんべ。手伝いに来たがら」

て、根っこ、いやというほど、佐兵は掘って呉だ。

「ほだに、根っこ掘ったらば、みなわかんねぐなっこで、稲。ほだに根っこ掘んねでけろ」

ていうたば、

「こいつ、いっぱい掘んねど、わがんねもんだ」

ていうて、ぼんぼんと掘ってくっじや。ほうしたば、かえって稲、すばらしくええぐなっただ。

ほうすつど、反対に、自分の家さ、酔えだどきに来て、豆畑のキツカケに、

「ようし、この前の時にさっじやがら」

て、久兄にやが豆の根っこを、いやというほど掘ったら、豆、みな枯れだじもの。久兄にやにやらっただ。

(佐沢口・佐藤継雄)

30 佐兵 ばなし — 魚屋に仇 —

佐兵が魚屋の前通つたれば、大きい鮭のよ、あつけども、

「そいつ、なんぼする」

「佐兵兄にやだからはあ、百にまけつかはあ」

「はいつ、もらうべはあ」

て、佐兵が持ったど。鱈屋もかしこくていつから、

「待つてろまず、佐兵兄にや、売る人は売んねでいらんねげんども、魚に聞いてみっから」

て、魚持つて、

「こりや、こりや、鮭のよ、佐兵に行きだいか、行きだくないか」
ていうたば、

「佐兵、行きだくないて言うから、今度の次に来て呉ろはあ」
て、止めら^やつじやもんだど。と、「ほうか」て、佐兵は来たもんだど。

こんどあ、よつぽど経つてがら、

「やいやい、魚屋」

「何だえ、佐兵兄にや」
なえ

「御祝儀すんなよ、ほんじえ、鯉のよ注文して、切ってもらいだいと思つてよ」

「ほうか、なんぼや」

「まず、このぐらい。十五ほど切つて呉ろ。つうと大きく切つて呉ろ、高いつたてええがら」

て、こんど、魚屋、注文どおりに大きく切つたんだど。一生けんめいでな。

「出た、佐兵兄にや」

「ほんじゃな」

て、佐兵は財布がら銭出して、

「こりや、こりや、銭、銭、にさ（お前）、魚屋さ行きだいか、行きだくないか。行きだくないから、魚屋、今度の次にして呉んだ」

これには困つたていうごんだ。大きく切つてしまったしなあ。

31 佐兵 ばなし — 魚屋 —

佐兵、魚屋さ行ってよ、魚切らせで、それから財布出して、銭さ、

「かいつ、買うか、銭。行くか行かねが」て。

「おら家の銭あ行きたくないて言うも」

て、魚買わねで来たど。

(川原子・鏡みやる)

32 佐兵 ばなし — 砂糖なめ —

安達屋という魚屋、高畠にあんべ。佐兵、そこさ行って、

「砂糖、なんぼで売っておぐやる」

ていうたば、

「なんぼ買われっこんだ」

ていう。

「おれ、この一樽、みな舐められんな」

「みな舐められるて、舐められんめえちやえ、そのようにいっぱいある砂糖、舐めらんねえごで」

ていうたば、

「いや、舐めらんねえざあない。みな舐められる。こだなもの」

すっど、こんど、安達屋の旦那、

「ほげなものの舐められっこんだら、我慢して舐めてみろ、舐めたら、みな呉れっから」

ていうたもんだから、一生けんめいその日は舐めて、舐めほうず（放題）舐めで、あと舐めらんねぐなったもんだから、

「明日来て、また舐めっかなあ」

て行つたど。そうして毎日砂糖なめに來らつじえ、一樽みな舐めらつじやという話だつたど。

(佐沢口・佐藤継雄)

33 佐 兵 ば な し ― 豆腐のすだれ ―

「久兄にや、久兄にや、あそこに豆腐で編んだすだれあつけぜ」

「豆腐で編んだすだれなて、豆腐ですだれ編まれんめえちやえ」

「ほだげど、あつから歩いでみる」

なて、連て行つた。そうすつど、

「ほらなあ、一封、二封、三封、四封……十封。ほら十封で編まったべ」

「なえだ、そつけなこと、おれも知つた」

なて、二人で楽しく「久兄にやと」世の中をすごして行つたてよ。

34 佐 兵 ば な し ― 豆腐のすだれ ―

佐兵が友だちさな、

「こりや、こりや、やいやい、豆腐で編んだすだれ見たことあつか」

「ばかやろう。ほに、すだれ、豆腐で編んだり、コンニャクで編んだり、されんめえちやえ」

「ほう、んじや、行ってみろ」

ほして、連^せて行つたど。

「こりや、どこにあつこど、豆腐のすだれ」

「そいつよ」

「葎^{よし}だ、でつか」

「ほだて、ええか。一封、二封、三封……十封。十封だべ、はいつ」

「また、テンツ語って」

「んだから、ちよえつと賢こくて居つずど、〈佐兵のようだ〉というたもんだ。

(佐沢・山田喜一)

35 佐兵 ばなし — 死んだ馬が草食つた —

佐兵が友だち同士で語ってで、

「これこれ、死んだ馬、草食つてだけ」

「馬鹿野郎、佐兵。てんつ語って。何、死んだ馬、草食うまえちやえ」

「歩^あいでみろ、ほんじや」

「て、わざわざ連^せて歩つたもんだも。一里もよ。して、

「そりや見ろ。どこにいたごんだ、死んだ馬」

「死んだ馬、そこで、くっさいべはあ」
ていうたど。

（佐沢・山田喜一）

36 長手の伊佐

伊佐という大泥棒は、笠、腹さあてて歩くじど、笠は落ちねがったほど早いのだったど。んだから、夜のうちに福島まで行つて泥棒して来るがったど。

このことは、みんな知つていっけんども、なかなか捕えようなくて、田の畔塗りしったどこ、

「伊佐！」て言えば、「はい」ていうて、上がつてきて、その足見たらば、水はいっこう、くつついでながつたていう。それは熱のためだど。

（佐沢・山田喜一）

37 船坂新兵衛

笠、胸にあてて走つど、落ちねほど早がつたど。福島まで一夜で行きかえりして泥棒してきたそうだ。

ここに、馬場数衛さまという家あつて、その破風に三日三晩泊つてだそうだ。二間半に四間もある大きな破風で、大黒柱がさしわたし三尺あつたという家だつたど。いろりが一間四方で、そこに焚く柴は一束ずつ、ほぐさねえで焚いたもんだていうんだな。

新兵衛は三日三晩、その破風さかぐつでいたげんど、とうとう何も盗らんねくて、数衛さまのご新造さまが髪とかしてでな、その鏡さ写つて、見つけらつてしまつたど。

新兵衛は船坂というどこに住んでいたが、捕り方が行つて、「新兵衛いるか」といふど、「はい」といふて、何時行つてもいつから、泥棒したという証拠もないていうんだ。

(中和田・我妻栄一)

38 馬場数衛の家

この和田にある馬場数衛の家というのは、大きい家で、破風だけで、二間と三間ぐらいあったそうだ。

その破風に、三年も泥棒が巢食ってあったど。

なるほど、盛りには蚕おいた家で、桑こき衆が、昼間だいうど、どこの人が何人、御飯食ったが、さっぱり分らねがったど。昼間ていうど、みな集まって来てよ。

和田では馬場数衛、長手では白石吉兵衛、それから亀岡では船橋盤内て、この三軒は、大名つぶつでも、つぶんねていわつたぐらい、資産家だったど。

(佐沢・山田喜一)

39 大黒さまのおかた

大黒さま、めつぼう餅好きで、昔から大黒さまざあ、人がええために、他の神さまに、しよねまつでいだもんだべ。

そして、餅搗いて御馳走して、餅で大黒さまを殺せていうわけだったそうだ。それで、招よばつで行くとき、秋なもんだから、大きな旦那衆で、大根洗いしつたけど、女中が。そして、

「大根一本もらわんねが」

というたところが、

「いや、旦那に、こいつ、勘定さつで渡さつでいるもんだから、とにかく上げらんね」

んだげんども、こうして見つだところが、まつた股出つた。

「こいつは、一本が一本だから、んじやらば、ぶつかいてやるか」
て、その股まつたのどこ、ぶつかいでもらつて、ふところさ入つて持つて行つたど。

「よし、大黒さま来た。餅、うんと食せで、殺してくれる」

というわけで、御馳走すつけども、餅食つては、ふところから大根出して食うもんだから、なんぼしても死なねどこだど。

大根は命の恩人だというもんだから、耳あけの日には、大黒さまのおかたというて、上げるようになったど。

(佐沢・山田喜一)

40 海上の石芋

弘法大師がきて、海上で、「芋一つ呉れろ」というたば、「石芋でわかんね、石芋だからわかんね」て、芋呉んねがった。

「石芋か、石芋か」

て、弘法さま、錫杖でつついでみただけ、それがらざあ、海上では、里芋ざあ植えらんねぐなって、みに石芋になって、わかんねど。

(佐沢・山田喜一)

41 長いむかし

天から、ふんどし下がつて来たけど。下までな。
それぐらい長いもの、あつか。

（佐沢・武田はる）

42 ノロノロ話

すばらしい大きい蛇が出てきて、（今日もノロノロ、明日もノロノロ、あさつてもノロノロ、その次の日もノロノロ…。

（佐沢・武田はる）

43 果なし話

大きな栃の木があつたど。秋になつて、栃の実一つ、ポトンと落ちて、コロコロ、コロつて、池さ、ポチャンと入つたど。そしてまた、ポトンと落ちて、コロコロ、コロ、ポチャン。またポトン…。

(中和田・我妻栄一)

伝説

(1) 遠藤初弥という人

遠藤初弥という人が、なかなか剛の者で、三山詣りに行つたが、荒武者のそのじさま、犬のことを「ケイヅカシシ」と言っていたが、三山詣の前に、「なめに、神さまなてあるもんでない」といって、殺して食つて行つたそうだ。ところが、

山のふもとで大腹痛みして困ったということがあった。

その人がまた、雨乞いのため福島のスルガミという豪士山のかげにあるところで豪士の風の神の石宮で、神を怒らせねど雨が降らないで、鈴もって滝壺に入ったら、帰りの豪士山でお雷に会って、ひどい目にあつたという。
(渡部隼人)

(2) 文 殊 尊

ババタケ山のどこに、ドンガエリという所がある。むかし、亀岡の蔵王さまが水浴びして、ドンガエリに来て休んだという。そこに大蛇がいて、ある人がそこへ行くと、火焰のような舌を出したのに当って、三十日も患つたという。

ジジタケ山(タカツムリ山)に御神木があり、稲刈り時の天気の良い日に、遠藤初弥が伐つたそうだ。そしたら、一天にわかにかきくもって、大雨になったので、鋸を取らないで這って逃げたという。

高島亀岡の文殊さまは、ババタケまでは亀できて、一の宮から亀岡までは獅子にのって、今のところに落付いたという。
(渡部隼人)

(3) ねずもち
鼠持の山の神

山の神には初穂の代りに男根を供えたものだが、男根を大人がいたずらすると、罰があたるが、子どもがいたずらしても、どういうことはない。大人が山の神に屁をひると、目がくらみ、腹がいたみ、目が一つ見えなくなる。
(渡部隼人)

(4) 山崎山・高内山・浅川山

置賜に山崎山と高内山と浅川山と三つそろっていた。そうすると、山崎山と浅

川山は男で、まんなかの高内山は女なんだそうだと。山崎山が高内山に言い寄って「おれのかかあになつてくれ」というので、身をまかせたら、浅川山は怒って、「なんだぞ、山崎山などに身をまかせて。おれには気もあるし、財産もある」と言つたので、浅川山へ身を寄せた。

山崎山と浅川山は喧嘩してしまつたので、高内山は、「そんじや、どつちやもさね」て、どうしたものか、石の森に聞いたと。

その石の森には岩に八幡太郎の馬のヒヅメの跡があり、そこが前九年、後三年の役の通り道だつたそうだと。

(鏡みやる)

(5) 石伝・折石

高房神社の石鳥居の石を運んだとき、折れたところが「折石」で、その石がめつぽう重く、道がわるかつたので、ようやく石伝を通して神社に運んだといふので、

その名がある。

(我妻栄一)

(6) 豊 後 屋 敷

昔、豊後の国から、二人づれで針売りにきたが、そのままここに住みついた。一人は七郎右エ門、もう一人は細谷の孫兵衛だという。

(我妻栄一)

(7) 海 上

海上とは、昔、海であつたところで、千石船の停つたところが〈千石〉であり、「船停めの松」も残されている。

(我妻栄一)

和田の昔話調査ノート

置賜民俗学会の昭和五十三年度、五十四年度の民俗調査を、ここ高畠町中和田、上和田にえらんで実施した。人数と調査日数の都合もあつて、不十分ながら、口承文芸を担当したことから、数人の話者から、昔話・伝説を聞く機会が与えられた。まだまだ不十分なので、出来れば今後も続けて実施したいと考えている。

和田地区は有名な亀岡文殊尊のある亀岡に隣接し、さらに南には上杉領の米沢がある。江戸時代に、幕府の直轄領と上杉私領との間を行ったり来たりしたという歴史的事情もあり、高房神社の由来などを見ても、古い時期に成立したということもあつて、さらに、亀岡文殊尊のにぎわいなどから、独自の文化圏をもつていたことは、たしかである。

昔話一つを取上げて、若い衆の間に、作業の合間、あるいは若衆が冬の間三々五々集まって藁仕事などをやった、木小屋生活の中で伝承伝播された「佐兵ばな

し」「長手の伊佐」「船坂新兵衛」などの世間話から、囲炉裏ばたへ入り込んで行った昔話がよく語られ、「誰でもが、二つや三つは知っている」というほど、親しまれているようである。またそういった文化遺産を地区で、大切にして行こうとして下さっていることは、うれしいことであつた。よい話者は今から見つかると思われるが、「若衆話」の山田喜一氏、動物むかしや本格昔話の武田はる氏などは大変すぐれた話者と思われる。

〈佐兵ばなし〉がその本場でもあるこの地域であり、今後も継続して調査に当りたいと考えている。

過般、高畠三中の資料をいただいていたが、私の採訪にない資料があるので許しを得て、記録のために記しておきたい。

① 佐兵のはばき

冬になつて皆んな、木小屋でわら仕事をしていだけど。そしたら、佐兵、はばきを四通あんで、「できた」と言つて皆んなさ見せたど。「佐兵、佐兵、お前のはばき四通か、そだな、はばき、あんめちや」て言つたら、佐兵おちついて、「米だて四通の俵に入れて、むぐらないもの、俺のすねむぐらないべ」と言つたけど。

② 佐兵にばかにされたはなし

昔、高橋屋敷に露藤の屋根葺きが二人で、屋根にのぼつて仕事をしていました。そこで、佐兵という人が通りかかり、屋根やさんに、「となりの人死んだ、今和尚様、たのみに行くところだ」と声をかけて通つた。屋根屋さんもおどろいて、家に帰って行きました。ところが死んだと思つた人が柿の木にのぼつて柿をもういでい

た。屋根やさんは佐兵に、「なんだ、死んだ人が柿の木にのぼって、柿とりしったではないか」とおこりながらいいました。佐兵は、「屋根からおりて行けとは言わず、ただ、となりの人が死んだと言っただけだ」といいました。

（「郷土の確認」 13 回 三中祭）パンフレットより

この調査にあたり、話者の方々はもちろん、和田地区公民館長はじめ職員の方々の多大の御協力、中央公民館の富樫氏、星寛治氏に深謝いたします。

武 田 正

高畠町和田の昔話

昭和五十四年八月三十日 発行

編 者 武 田 正

南陽市赤湯旭町三二八〇の四

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成十八年七月三十一日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇三三―六八八―七五四四